

長編青春小説

青山物語

清水義範

1971





光文社文庫

長編青春小説

青山物語 1971

著者 清水義範

1995年5月20日 初版1刷発行
2004年1月5日 初版2刷発行

発行者 八木沢一寿
印刷 大日本印刷
製本 大日本製本

発行所 株式会社 光文社

〒112-8011 東京都文京区音羽1-16-6

電話 (03)5395-8149 編集部

8114 販売部

8125 業務部

振替 00160-3-115347

© Yoshinori Shimizu 1995

落丁本・乱丁本は業務部にご連絡くだされば、お取替えいたします。

ISBN4-334-72048-X Printed in Japan

本書の全部または一部を無断で複写複製（コピー）することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター（03-3401-2382）にご連絡ください。

JASRAC 出第9561003-302号

光文社文庫

長編青春小説

青山物語1971

清水^{よしのり}義範



光 文 社

目次

第一章 四月

7

第二章 初仕事

45

第三章 梅雨

85

第四章 夏

125

第五章 秋

163

第六章 冬

201

あとがき

241

解説

花田 吾一
はなだごいち

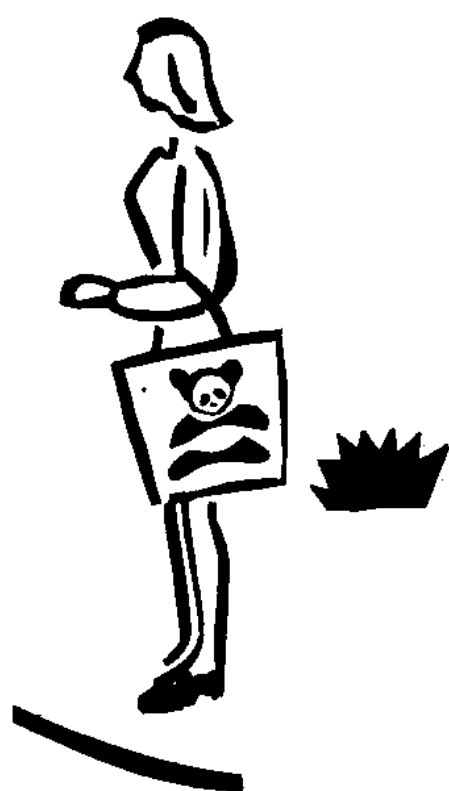
243

本文イラストレーション／まつもとたかし松本孝志

青山物語

1
9
7
1

第一章 四月



1

『アンアン』のページをめくると、カラー・グラビアページのミニスカートのモデルが、ぽつくりのように底の厚いサンダルをはいていたという時代の話である。コルク製の靴底の高さが七、八センチはあった。

昭和四十六年。一九七一年のことだ。

大田区上池台^{おおた かみいけだい}という、東急池上線長原駅^{とうきゅういけがみ ながはら}から歩いて五分のところにある、四畳半一間の下宿の部屋を出発した平岡義彦^{ひらおかよしひこ}は、池上線で五反田^{ごたんだ}へ出た。そこでまだJRにはなっていない、国鉄山手線^{やまのて}に乗り替え、渋谷^{しぶや}まで。

九時をまわっているから、そんなにひどいラッシュではない。そのことは、社会人一年生の義彦にとって幸運なことであつた。勤めた会社が十時始業という、ゆるい労働時間のところだったのである。

渋谷から、地下鉄銀座線^{ぎんざ}に乗る。ひとつめの駅が「神宮前」^{じんぐうまえ}（今の「表参道」^{おもてさんどう}）ふたつめが「外苑前」^{がいえんまえ}である。その外苑前で降りて地上へ出る。

出た大通りが国道246、そのあたりでは青山通りと呼ばれているものである。道の北側が、

港^{みなと}区北青山^{きたあおやま}で、南側^{みなみあおやま}が南青山。そんな地名は今も昔も変わらないか。

しかし、平岡義彦が降り立った青山と、今の青山とは大いに違っていることもある。

駅から、青山通りを赤坂見附^{あかさかみつけ}方面に、道の左側を進む。するとすぐ、やけに古ぼけた三階建てのビルが道に面して建っていた。雨のしみがこびりついてとれないような、お化けでも出そうなビルである。

それが、青山電話局であった。

そう。現在のそのあたりを知っている人は言うであろう。今もそこに、NTTのビルがあるぞ、と。

今の高層ビルに建て替わる前の、古い電話局ビルがあそこにはあったのである。位置的には、今のNTTビルの前の広場のようなところのだが。

そして、その電話局ビルの周辺は、ごみごみとした薄ぎたない住宅街だった。道に面して建ってる家ですら、ほとんど木造の二階建てだったが、区画整理の話が進められているのか、人の住む気配のないが多かった。そんな中に、ガラス張りの喫茶店がやっとひとつあるくらいで。その喫茶店の少し先に、やぶ、というそば屋があった。

表通りから一本中に入れば、まさしくこぎたない住宅街である。道がそもそも、家と家の間の、ぬけられます的路地の感じだ。そういう路地の一部分は、地道だったのだよ。舗装がして

なかったのだ。信じられますか。

そしてごみごみと、小さな家や、安っぽいアパートが建っていた。中に三階建てアパートなんかがあると、場所柄からか、偉そうにナントカ・マンションという名がついていたりした。

義彦は電話局ビルの前をすぎると、喫茶店のところまでは行かず、その手前で左に折れる路地に入った。喫茶店のあったところあたりは間もなく、ハザマビルというものになる運命である。そば屋のやぶのあたりが、後に伊藤忠^{いとうちゅう}本社のビルになる。

というわけで、義彦が曲がって、やがて行きついた、彼の勤める会社のあるマンションは、今で言うところとN T Tのビルの裏あたりである。

マンションと言っても、そう、さっきも言ったような次第であるから、鉄骨モルタル造りの三階建てマンションである。一フロアが一軒で、それが二LDKしかなかったというのだから、その小ささがわかるであらう。

その、パール・マンションの鉄製の外階段を、ゴンゴンと音を立てて登っていき、三階に達してそこにあるドアを開ければ、そこが彼の勤めることになった会社、株式会社フィールドであった。

靴を脱いであがると最初にあるのが、十二畳くらいの板張りのリビングルームである。その部屋の三つのコーナーに安っぽいスチール事務机が置いてあった。そして中央には、偽レザー

張りの応接ソファ・セットがでんと据えられていた。

リビングルームのイメージ・カラーは黒であった。手造りらしい棚家具が、真っ黒に塗られていて、その棚に、漁師からもらってきたような、ガラス製のブイの玉のようなものが飾っている。そして、その部屋でもっと目立つのは、間仕切り代わりに壁際に立てられている、巨大な写真パネルであった。

ロック・ミュージシャンを写したやけに暗いモノクロ写真。それを、畳大のパネル六枚に引き伸ばしたと考えてもらえばいい。そういうパネルを壁の飾りに立てているわけだ。

なぜそんなパネルがあるのかを簡単に説明しておこう。フィールドの社長越川直人^{こしかなおと}は一年前に脱サラして独立したのだが、それ以前は広告代理店に勤めていた。その、広告屋時代に、ポスター撮影の背景として、そのパネルを製作したのだ。そして、用済みになってから、これカッコいいからもらおう、ということにした。そんな次第である。

パネルのことなどどうでもいいのについ説明してしまったのは、それがあるせいで、そのオフィスがなんとなくアン格拉っぽい（出た！ 懐かし^{なつ}のキーワード）ムードになっていたと思っただけなのである。アン格拉っぽいということは、一九七一年においては、ナウくて東京的だ、ということであった。

パネルの一枚の、床から一メートルほどの高さのところに、壁かけ式の電話が取りつけてあ

る。そしてその周囲のパネルの、白っぽい部分にはフェルトペンで電話番号などのメモが乱雑に書きなぐってある、という具合だった。そういうところも、会社らしくなくてアヤシゲなムードなのだった。

リビングルームの奥に、振り分け式に二つの部屋があった。どちらも畳敷きだが、カーペツトを敷いて事務所に使っている。左の六畳間が社長の越川と、その腹心の部下である鉄本の机がある部屋。そして右の八畳間の中には机が三つあり、そのうちのひとつはグラフィック・デザインをするための製図用デスクのようなものだった。こっちの部屋を使っているのがどういう人間かということは、いずれおいおいに語っていくことにしよう。

とにかく、平岡義彦は株式会社フィールドに出家した。

リビングルームの、玄関ドアに一番近いデスクに面してすわっていた竹内迪恵たけうちぢえが、おはよう、と声をかけてくれた。

2

四月十日から義彦はフィールドの社員ということになったのだが、三月末日の時点では、自分がそんなところで働くことになるとは夢にも思っていなかった。運命の糸に操られるように、

という表現は便利すぎるなあ、どんな人生だってそう言えるじゃないか、つまりまあ自分でも理由がよくわからないまま不思議ななりゆきで、その社員になってしまったのだ。

平岡義彦は愛知県名古屋市の出身である。県下の教育大学をこの春卒業した。一年浪人しているから、今現在二十三歳である。

その大学の卒業生のほとんどが（当時は）愛知県下の教員になるのが普通だったのに、義彦は自らその進路を捨てた。そして彼は、何が何でも東京へ出て働かなくちゃいけない、と堅く決心をしていたのであった。

なぜかという、彼は将来小説家になりたいという夢を、コケの一念のように持っている男だったのだ。とりあえずはSF作家がいいかな、なんて思っている。そして夢を実現させるには、少なくとも夢に向かって前進するためには、名古屋で小学校の先生をやっているじゃダメで、どんなことをしてでも東京へ出て働かなければならないと思っていた。

そのところ、よく考えてみると、わからない理論である。学校の先生っていうのは、他のサラリーマンよりは自由な時間がありそうで、作家志望者向きの職業のようにも思えるのにな。名古屋にいたって小説はもちろん書けるわけだし。

でも、義彦はそうに思い決めてしまったのだ。絶対に東京に出なくちゃ、と。

ところが、就職活動でつまづいた。いくつか受験した東京にある出版社の就職試験に、全部

落ちてしまったのである。

大学を卒業してしまい、もう三月も終わりそうだという時に、義彦の身の振り方はまだ決まっていなかった。

そこに登場したのが、東京（実は埼玉）にいる母方の叔父さん、という人物だった。その叔父さんは中小企業振興会の出先機関のひとつのメディア・サービスなんとやら、という、何をしてるのか見当もつかないところで働いているのだが、とにかくその人が義彦の消息を伝えきいて、就職先を世話してくれたのである。

四月三日に上京し、なじみの薄い叔父と二人で、フィールドの越川直人社長と喫茶店で面談をした。二人は越川が広告屋時代に、仕事を通じて知り合った仲なのだそうだ。

「人を探しているってきいたものだから」

「ええ確かに、文章の書ける人がほしいというのは事実なんですが」

「文章書くほうは、一応できるんだよね」

叔父は義彦のほうを見てそう言った。

「はい。大学の四年間、ずっと同人雑誌活動をしてきましたので」

越川はためらっている様子に見えた。義彦は、これだけが望みの綱だという気になり、しきりに頭を下げた。

「広告製作のほうはもうやらないの」

叔父は越川にそんなことをきいたりした。

「頼まれれば、それもやらないわけじゃないんですけど、それよりも当初の目的通り、情報サービスの方を中心にしていきたいと思ってるんです」

越川はそう答えた。まだ若くて、人生への野心に燃えている印象の人間であった。この時三十一歳なのである。

情報サービスというのは、具体的にどんな仕事なんだろう、と義彦は思った。同じ疑問を持ったらしく、叔父が尋ねた。越川はこんなふうに答えた。

「とりあえず会社を、若者研究所だということにして世間にアピールしていこうと考えているんですよ。このところ、フーテンとか、ヒッピーのような若者が出てきたり、文化的にもアングラ劇団とかいろいろ若い人の新しい動きが出てきていますよね。ミニコミ誌が盛んに発行されたり。どうも七〇年代っていうのは、そういう新しい若者が時代をリードしていくような気がするんです。だから、企業側としてもそういう、若者の新しい動きを研究する必要があるですよ。それで、その研究をうちが代行しよう、というわけです」

なるほど、若者研究所か、と義彦は思った。

それで、正当に判断すれば、名古屋でひたすら創作三昧さんまいの青春を送っていた彼としては、ぼ